

ウェスレー・メソジスト学会 (総会・研究会) on ZOOM



2023 **9** / **11** (月) 日本基督教団・

渋谷教会 1 F

1 : 00 ~ 2 : 15 研究発表

森下滋氏

坂井哲博氏

田添禧雄氏

2 : 15 ~ 3 : 00 総会と懇談会 (参加者の紹介)

3 : 00 ~ 4 : 30 公開研究会

メソジストの「知と信」の統合

"Let us unite the two so long divided, knowledge and vital piety"

ジョン・ウェスレーが語ったように、ウェスレーは学問と信仰の重要性和シナジーを強調しました。

今回の講演では、ジョン・ウェスレーが創設したメソジスト運動における教育と学問の重要性を探求し、それが現代社会におけるキリスト教の妥当性とどのように関連しているのかを検討します。

科学と信仰、理性と敬虔さを調和させ、信仰と学問が共存するキリスト教の未来への視点を探ります。



講演ポール・土戸・シュー氏 (青山学院大学文学部教授・学院副院長)

- ハーバード大学神学部 (修士)、フラー神学校 (博士)、論文・著書多数
- 米国合同メソジスト教会の福音派宣教グループ (Mission Society for United Methodists) と UMC 正規のミッションボードの宣教師として来日。メインラインと福音派、メソジストとホーリネスに学び、ペンテコステ運動を研究。世界のメソジスト系大学交流に積極的に貢献

研究会は対面、ならびに**zoom**で行われます。右のQRコード
アプリからは ミーティングID 824 024 2962
パスコード MjXiW4 (MXWは、大文字)



●新会員のご紹介

森下滋氏 日本基督教団千葉本町教会副牧師 (更新伝道会)

はじめまして。この度2023年度より貴学会に入会させていただきました森下滋と申します。この場で自己紹介をさせていただきますことを光栄に思い、不足ながらも書かせていただきます。

1. 信仰的背景

私はノンクリスチャンの家に4男として1975年に生まれましたが、諸事情により母の姉夫婦に生後50日で預けられました。その夫婦は日本福音教会連合というホーリネスの小さな群れの牧師であり、教会で育ち、6歳で受洗し、1994年に大学へ入学して鳥取県の米子市から関東圏へと移りました。反抗期の頃より教会から離れ、帰省しても礼拝には出ませんでした。神と離れた20年弱の人生を経て、再び神様と出会い、悔い改めて教会へと導かれました。以後、東京バプテスト教会(現在単立)での教会生活の中で、献身の思いが与えられて、東京神学大学へ編入し、大学院修士課程を修了して、現在は韓国ソウル市の監理教神学大学大学院博士課程にてキリスト教倫理学分野で博士論文の準備中です。東京神学大学入学後、日本基督教団へと転入会して、更新伝道会の系列教会で神学生として学ばせていただき、現在まで更新伝道会にお世話になっております。

2. なぜメソジスト/ウェスレアンなのか？

この質問は、韓国メソジスト教会の方々からよく尋ねられる質問であり、また自己の立ち位置を再確認するうえで重要であると考えています。いわゆるホーリネス信仰(四重の福音)を基盤とする教会で信仰生活を始めましたが、ごく一般的なクリスチャンの内面に存在し続ける、「私は本当に救われているのだろうか」という、まさにウェスレーが抱いたような悩みは子供から青年へと成長しても依然として残り続けました。

東京神学大学での神学研鑽は、その多くが改革長老派的な神学体系を継承しており、理性的でありとても有益でした。しかし、ルターを読めばウェスレーが思い起こされ、カルヴァンを読めば、ウェスレーならいったいこの問いにどう答えるであろうか、と考えるようになりました。

ジャズピアニストとして20代前半より現在まで多くの活動をしてきましたが、そのうちの3分の2は放蕩息子として生きてきました。回心を通して再び主と出会えたことを経験する私は、やはり義認の強調だけで救いについて、また終末に向けての福音の言葉を伝えることは、とても自己の実存的に

は難しいことです。そして、選びの強調の教理に対しても、やはり神学的な疑問を持たざるを得ません。

韓国のメソジスト教会で現場にいる牧師たちや神学生たちと接する中で感じることは、彼らはウェスレー神学について一定の基礎知識は持っているが、ウェスレアンではないなと思わされます。神学生たちは按手に向けて一生懸命必修科目であるウェスレー神学を世界でウェスレー神学で学位取得をした神学者たちから学びますが、その知識は個々の魂に受肉しているかは疑問です。ですから韓国のメソジスト教会と長老派の教会は、礼拝や説教、教会形成なども実質的にはかなり近く、信徒たちは言わずもがなです。という私は、メソジストとして生きているというよりは、日々メソジストとして歩んでいきたいと思って、学びと実践を続けるように努力しています。

3. 研究の方向性、関心 などについて

現在準備中の博士論文は「スタンリー・ハワーワスの和解論における聖化の位置づけ」という内容を構想中です。私たちが生きるこの世界で、実際の和解、すなわち互いの赦しに関係して、ハワーワスもウェスレー神学における社会的聖化の働きを視野に入れていますが、アキナスの思想を用いた徳倫理学、或いはヨーダーの非暴力主義と結合したナラティブ神学、或いはバルト的なキリスト中心主義教会論などの多様な傾向が統合されているハワーワスの神学において、和解はどのように考えられているのかを探ってみたいと考えております。

また、修士課程の時よりフェミニスト神学を続けていますので、特に聖書解釈学と社会倫理においてフェミニスト解釈の視点を忘れないようにしたいと思っています。フェミニスト視点から、ウェスレーが生涯追い求めた神の像の回復について思索し、現在から終末における新しい創造へと至る聖化の道を歩んでいく神のナラティブを宣べ伝えて参りたいと思います。

はじめまして。この度2023年度より貴学会に入会させていただきました森下滋と申します。この場で自己紹介をさせていただきますことを光栄に思い、不足ながらも書かせていただきます。

1. 信仰的背景

私はノンクリスチャンの家に4男として1975年に生まれましたが、諸事情により母の姉夫婦に生後50日で預けられました。その夫婦は日本福音教会連合というホーリネスの小さな群れの牧師であり、教会で育ち、6歳で受洗し、1994年に大学へ入学して鳥取県の米子市から関東圏へと移りました。反抗期の頃より教会から離れ、帰省しても礼拝には出ませんでした。神と離れた20年弱の人生を経て、再び神様と出会い、悔い改めて教会へと導かれました。以後、東京バプテスト教会(現在単立)での教会生活の中で、献身の思いが与えられて、東京神学大学へ編入し、大学院修士課程を修了して、現在は韓国ソウル市の監理教神学大学院博士課程にてキリスト教倫理学分野で博士論文の準備中です。東京神学大学入学後、日本基督教団へと転入会して、更新伝道会の系列教会で神学生として学ばせていただき、現在まで更新伝道会にお世話になっております。

2. なぜメソジスト/ウェスレアンなのか？

この質問は、韓国メソジスト教会の方々からよく尋ねられる質問であり、また自己の立ち位置を再確認するうえで重要であると考えています。いわゆるホーリネス信仰(四重の福音)を基盤とする教会で信仰生活を始めましたが、ごく一般的なクリスチャンの内面に存在し続ける、「私は本当に救われているのであろうか」という、まさにウェスレーが抱いたような悩みは子供から青年へと成長しても依然として残り続けました。

東京神学大学での神学研鑽は、その多くが改革長老派的な神学体系を継承しており、理性的でありとても有益でした。しかし、ルターを読めばウェスレーが思い起こされ、カルヴァンを読めば、ウェスレーならいったいこの問いにどう答えるであろうか、と考えるようになりました。

ジャズピアニストとして20代前半より現在まで多くの活動をしてきましたが、そのうちの3分の2は放蕩息子として生きてきました。回心を通して再び主と出会えたことを経験する私は、やはり義認の強調だけで救いについて、また終末に向けての福音の言葉を伝えることは、とても自己の実存的には難しいことです。そして、選びの強調の教理に対しても、やはり神学的な疑問を持たざるを得ません。

韓国のメソジスト教会で現場にいる牧師たちや神学生たちと接する中で感じることは、彼らはウェスレー神学について一定の基礎知識は持っているが、ウェスレアンではないなと思わされます。神学生たちは按手に向けて一生懸命必修科目であるウェスレー神学を世界でウェスレー神学で学位取得をした神学者たちから学びますが、その知識は個々の魂に受肉しているかは疑問です。ですから韓国のメソジスト教会と長老派の教会は、礼拝や説教、教会形成なども実質的にはかなり近く、信徒たちは言わずもがなです。という私は、メソジストとして生きているというよりは、日々メソジストとして歩んでいきたいと思って、学びと実践を続けるように努力しています。

3. 研究の方向性、関心 などについて

現在準備中の博士論文は「スタンリー・ハワーワスの和解論における聖化の位置づけ」という内容を構想中です。私たちが生きるこの世界で、実際の和解、すなわち互いの赦しに関係して、ハワーワスもウェスレー神学における社会的聖化の働きを視野に入れていますが、アキナスの思想を用いた徳倫理学、或いはヨーダーの非暴力主義と結合したナラティブ神学、或いはバルト的なキリスト中心主義教会論などの多様な傾向が統合されているハワーワスの神学において、和解はどのように考えられているのかを探ってみたいと考えております。

また、修士課程の時よりフェミニスト神学を続けていますので、特に聖書解釈学と社会倫理においてフェミニスト解釈の視点を忘れないようにしたいと思っています。フェミニスト視点から、ウェスレーが生涯追い求めた神の像の回復について思索し、現在から終末におけ

る新しい創造へと至る聖化の道を歩いていく神のナラティブを宣べ伝えて参りたいと思います。

朴清民氏

「私とウェスレー研究」

私は、日本人の父と韓国人の母の間に生まれたハーフです。幼い頃から自分のアイデンティティに対して大きな葛藤がありました。この悩みに関して誰にも深く分かち合うことができませんでした。父は、建築ビジネスに携わっていたため大変忙しく、家庭に関して無責任だったために、経済的に厳しい生活が続いていました。このような家庭の状況に置かれていた私は、新しい服を買ってもらったことや塾に通わせてもらったことがありませんでした。学校の授業料を支払えなくて呼び出されたことが何度もありました。母は真実なクリスチャンでしたので、このような状況の中でも、幼い頃から教会に通い、牧師をはじめ多くの信徒たちから、愛と関心をたくさんいただき、信仰も育まれました。

学生時代は、優秀ではありませんでしたが、学業には一生懸命に取り組みました。その後、軍隊での2年間の兵役を終えた後に、日本で建設事業をしている父のもとで経営を学ぼうと決心し、2005年に大阪へ留学に行くことになりました。当時、日本語を話したり、聞いたりすることができなかつたので、日本語学校から通いました。もちろん、勉強の厳しさもありましたが、特に文化的な生活習慣があまりにも掛け離れているという面で苦労しました。しかしある日、教会の先生との交わりの中で、人生の証を聞く機会がありました。その先生の人生の証を聞きながら「私と先生は、同じ神様を信じているのに、どうしてこんなにも人生の歩みが違うのだろう」と思いました。そして、聖書のみ言葉が誤りのない神の言葉であり、真実にその約束を守られるお方であるならば、聖書のみ言葉通りに従順したいと決心しました。「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます（新改訳2017-マタイの福音書6:33）」。

関西大学の商学部に入學し、学校の勉強やアルバイトに追われながらも、教会で魂の救いと弟子作りに必要な聖書勉強や伝道方法など、さまざまな弟子訓練を受けました。そして、大学のキャンパスや駅で伝道をしながら、多くの人々に福音を伝えました。その中には、受洗者や献身者も与えられて、福音の伝道者になることの幸せと喜びを味わうようになったのです。もちろん、日々時間に追われる中で、時には睡眠時間が足りなくて倒れたこともあり、経済的に厳しい状況で心理的な圧迫感もありましたが、神様は様々な方法や人を通して、私の生活を守って祝福を与えてくださいました。当時、教会の牧師は私が献身者としての道に進むことを何回も勧めてくださいましたが、私には神様に与えられた経営マネジメントという賜物をいかして、日本宣教に献身したいという思いがありました。ですので、詳しく将来の人生設計図を立て、その目標に向かって一つ一つ準備していました。大学を卒業し、経営コ

ンサルティング会社に勤めた後に、個人会社を設立しましたが、神様は経営者の道ではなく、神学校の道へと道いて下さったのです。

2014年4月に東京基督教大学の教会教職者課程に3年次編入し、2020年3月に同大学院にてM.A (Master of Arts in theology) を授与されました。しかし私は、長老改革派の教会で信仰生活をしてきて、特にジャン・カルヴァン神学の立場にいました。神の絶対的な主権のもとに、人間の自由と選択、関係が神の計画に従属していること、人間は自由な選択を持っているように見えますが、実際には神の主権の中で行動しているとされることに、疑問を持つようになりました。何より、教義的に閉じられた排他的な神学ではなく、現場の中心に立ち、命を救う愛の神学を学びたかったのです。聖書に根拠を持ち、教会の伝統と現実の生活、神の恩寵と人間の応答、社会的な救済と個人的な聖化、合理的な理性と経験の福音的なバランスを維持していたウェスレー神学を学びたいという思いがあったのです。

そして、2020年4月に日本ホーリネス教団の東京聖書学院に入学し、3年間ウェスレー神学を学ぶことができましたが、特に小林和夫の著書『キリスト教の確かさ』、清水光雄の著書『ウェスレーの救済論』、藤本満の訳書『キリストの完全』に大きな影響を受けました。卒業後には、日本ウェスレー・メソジスト学会で、ウェスレーの学びを深めていながら、実際の牧会現場にも適応したいと思いました。このような私を日本ウェスレー・メソジスト学会に受け入れてくださり、心から感謝しております。最後に、私が一番興味のある研究テーマは、ウェスレーとインマヌエルです。晩年ウェスレーが残した言葉だと言われる「The best of all is god is with us」は、彼の波瀾万丈な人生の歩みと働きをコンパクトにまとめていると思います。なので、ウェスレーの働きをインマヌエルの視点から考察しつつ、取り組んでみたいと思っています。

新会員 高橋一樹先生（湘南グレースチャペル）のご紹介は後ほどいたします。